

垂水史談会報

第55号
2024(令和6)年
3月発行

【報告】

日本遺産「薩摩の武士が生きた町」 「もつと垂水の魅力を知る講演会」

一月二十八日(日)午後より垂水市民館において、日本遺産「薩摩の武士が生きた町」もつと垂水の魅力を知る講演会」が開催され、令和五年度の垂水史談会の研修として取り組み、会場には約70名を超える方々が来場しました。

鹿児島大学名誉教授の原口泉先生により「垂水麓の魅力とその歴史」として講演が行われました。史談会では市内の名家にのこる名品の数々を会場に掲示して、垂水にある文化や歴史を紹介しました。



『第六垂水丸』沈没事故80年

垂水のほか鹿屋、肝付、南大隅各市町で写真展示

終戦間際の昭和十九(一九四四)年二月六日(日)、第六垂水丸は乗客を満載し、垂水港の長棧橋を離れて鹿児島方向へゆっくりと舵を切った所、バランスを崩して転覆、沈没しました。原因は定員(340名)を超える700名以上の人々が乗船したからでした。

垂水史談会では遺族会の解散後も毎年生き残った方の経験を聞いたり、朗読会を開催してきました。しかし、当時を知る方々の高齢化やコロナの影響もあり、数年まえから図書館のスペースを利用して市教育委員会と資料展示を行っています。



今年(令和6)は事故後80年を迎えるに当たり、540名の犠牲者が大隅半島、特に肝属地区に多いこともあり、大隅史談会はもとより、新聞社や行政の協力を得て鹿屋、肝付、南大隅各市町の庁舎や図書館などで約1か月間、写真や新聞記事などの展示を行いました。

垂水会場では第六垂水丸

が引き上げられて修理され「第一垂水丸」と船名を変えて進水した時、係留ロープを切断した木槌のほか、その「第一垂水丸」が昭和二十四年六月三日に昭和天皇行幸の御召船になった(船上から天皇が帽子を振る様子も)写真も展示。さらに、霧島市の赤崎雅仁氏のご厚意により、当時の中国東北部に關東軍が関与して建てられた『満洲国』の一端を示す資料として「満洲国切手」も併せて展示しました。

以下、アンケートより

【垂水会場】2/1/2/25

「当時亡父が鹿屋農校3年で垂水丸に乗船し、生き残った一人です。このことは父が亡くなる10年ほど前に初めて知りました。

語る気持ちになるのにそれだけ歳月を要したのが、この展示を見て分かったような気がします。(51〜80才 鹿児島市)「未来に渡って残すべき資料の数々。常設展示すべきと思います。(51〜80才 垂水市)」「自分の地元でこのような悲惨な出来事があったことを知り、しようげきをうけた。(21〜50才 鹿屋市)」「母の姉が乗っていたと母から聞いていた。母も連れて来たかったのですが、歩けず、今日は孫を連れて来ました。記事

を見て涙があふれました。乗船客数が多かったと聞いていました。伯母は18連隊所属の夫の面会に行くところで重箱を持っていたと思います。その時、お腹も大きく19才だったと母より聞いています。今元氣だったら99才。母は96才ですが姉の分まで長生きしています。姉のことは忘れていません。(51〜80才 東串良町)」「昭和19年、旧制中学2年生でした。同級生の前野君が垂水丸で死亡しました。悲しんだことを思い出します。(81以上 鹿屋市)」「祖父が事故で亡くなり、残された祖母と父を含めた兄弟たちがとても苦勞したことを聞かされて育ちました。おじも亡くなり、父が学校にも行かずに大工となり、弟、妹たちを養ったこと



など聞いていたので、昨年亡くなった父のかわりに展示を見に来ました。これから父のお墓に行き、一緒に眠っている祖父やおじにも見てきたことを報告しようと思います。



できれば父と一緒にこの話をしたかったです。企画、ありがとうございます。

「ございました。(51〜80 始良市)」

【鹿屋会場】1/29〜2/9

「母の姉が乗船しており、亡くなつたと常に聞いております。(51〜80 鹿屋市)」「もつとこ様な事があつたという事を市民の方々が知っておく必要がある。(51〜80 鹿児島市)」「私のおばもこの船に乗船予定でしたが予定が狂い、乗らずにすんだという事を聞いたことがあります。それから私もこの件について知りたいと思ひ、色々調べたことがあります。これからも語り継がなければいけないと思います。(51〜80 鹿屋市)」

「私の親戚の方も乗船して亡くなり、小さいころから聞いてはいましたが、詳しいことは何も知りませんでした。朗読会やこのようなイベントで語り継いでいかないと、本当にだれも知らなくなるのではないでしょうか。(51〜80 鹿屋市)」「こんな事故があることを知らなかったので、勉強になりました。(11〜20 鹿屋市)」「父が乗船していましたが、幸いに助かりました。幼いころから年に2回の誕生日をしました。私はまだ生まれていませんでしたが、子どもの頃より何度か聞かされていたので、目の前でその風景を見ていた様に感じています。(51〜80 鹿屋市)」



【肝付会場】2/1〜2/29
「私が生まれた年で、父が船に乗る予定でしたが、乗り遅れて助かった、と話していました。(51〜80 肝付町)」「竹之井さんが亡くなられた時にこの展示をしているって何か感慨深いです。事故は図書室で竹之井さんの本『冬の波』を読んで知りました。涙が出ます。(51〜80 肝付町)」「語り継ぐ会を大事にして続けてほしい。(51〜80 肝付町)」「父が弟に送ったハガキが昨年見つかり、その中に書かれていて知った。今後は他の展示も見つかりそうです。(51〜80 肝付町)」「80年前の悲劇を今に伝える貴重な証言の数々を知り、地域の歴史を新たに発見することができました。(21〜50 肝付町)」「6年後に助けられた赤ちゃんと助けた人との二人の再開には感動しました。夢の中の出来事とは思えませんでした。(81以上 肝付町)」「南大隅会場」2/1〜2/9

「川元ヨシさんのお墓の写真、記事を初めて見ました。(51〜80 南大隅町)」「とても感動した。(11〜20 南大隅町)」「私は記おくはないですが、姉たちの話を聞き、どんな事故だったのか写真でもあつたらと思つて居りました。本日はこんな事故が起ころないように見学できてありがたいとうございました。(81以上 南大隅町)」「第6垂水丸遭難について知らなかったのですが、知ることができて良かったです。(21〜50 鹿屋市)」「以前SNSの投稿にて事故のことを知っていたものの、このような形式の展示を拝見するのは初めてだったので、拝見することができてとても有難く思つております。21〜50 日南市)」



大正三(一九一四)年の桜島大噴火より、今年で一一〇年。『垂水史談会報』の前身、『垂城史談』第二号(昭和六年六月十五日発行)に掲載された「消防逸話」は噴火時の消防手の活躍をドキュメント風に活写しています。今号より数回に分けて掲載します。(読みづらい箇所にはルビを付けてあります。)

筆者の上川床氏は、後に児童養護施設「大隅学舎」(鹿屋市)を創立した人物です。

消防逸話 ①

垂水警察署

上川床久

大正三年一月十二日、わが県民の心胆をいやというほど寒からしめ、桜島島民はもろろん、周囲の牛根、垂水の村人の衣食住を剥奪した桜島爆発に因んだ物語で、わが親愛なる垂水消防組員のいかに活動して、消防手たるの責任を果たしたるかの一節であります。当時の模様は到底、筆舌の尽くす能わざるところで、拙文もとより隔靴搔痒の思い多々ですから、読者諸賢に前以てお断り致しておきます。

鹿児島市を去る五湮、海を距て高く聳ゆる高隈山の西裾野、波静かに水清く、錦江湾に沿い、人情淳朴にして昔時より幾多の史実に富む肝属郡垂水村も、明治の御代は大正の聖代に移り、村民は新しき御代の第二の新年を迎え、屠蘇の香まだ失せやらぬ大正三年一月十二日、平素豊屋を渡世とせる垂水村青年消防手、安楽金助君は早朝午前五時というに飛び起き、後事を妻ニカに託し、午前六時には得意先なる垂水村市木、蒲生峽吉方へ、暈修繕に出かけ、脇目を振らずしみ出る額の汗を拭きつつ、針を急がしつあり。

東天に旭日の笑顔現れ、軒端の霜も溶け流れ、木々の小鳥も榮しく啼き出る午前十時五分、西桜島村字赤水の直上、山腹谷間より俄然、一大音響とともに爆発的噴火あり。最初、一団の黒煙むらむらと湧き登ると見る間に、同十分頃、その基底よりは焰々たる火花頻りに射出するとともに、轟々遠雷のごとき声響き起り、時の移りにつれ噴煙愈々盛んに轟声急。後ること約十分、更に南岳東麓、鍋山頂上より西南部に当たり爆発し、濛々たる黒煙、高く天半ばに沖し、灰黒色の噴煙は濛々々々として嵩を増し、恰も恰も画伯の丹精を凝らした昇天の蛟龍に似、余煙風に吹かれ東に靡き、肝属の天地を掩い、何時停止するや予測し難きを、君もまた村人とともに働く手を休め、物珍しく望見しつあり。垂水警察署長・松下警部補は避難民より、焼石落下甚だしく、海瀉部落は火災惹起の虞ありと聞き、急きよ部下署員並びに消防組員の非常召集を行い、避難民の救護、火災の予防警戒に当たらしめたり。

君の仕事場には警鐘の響、達せざるため、消防手の出勤を知らざる君は再び針を運ばんとする時、午前十一時、ふと目に映りたるは小頭・内田金助氏を始め、同僚消防手五六名、消防法被に身を固め、何れも海瀉方面に飛んで走りつゝあるを以て、平素責任感旺盛なる君は、直ちに蒲生峽吉氏に事情を告げ、仕事を止めて自宅へ駆けつけ、仕事を脱ぎ捨て、法被に草鞋脚絆の出で立ちにて、同僚に後れじと後を追ひ、海瀉天神ヶ崎海岸と目指して駆け出したり。

(以下、次号)

―たるみず春秋―

今日の日を陽炎のごと忘れ行く

小牧トシ子

一読して「同感!」と思われた向きも少なくあるまい。年を重ねるごとに忘れて行くものが多くなる。が、心配することはない。すべての物事を覚えていけるとなると、たまつたものではない。人間の体は良く出来ているのだ。この作品は、たゆたう陽炎のように「今日の日」もゆらゆらと忘却の彼方に去ってゆくのだが、あわてず泰然としてそれを見守る作者がいる。

作者の生き方が「陽炎」を使つてうまく表現された作品。

(季語:陽炎・春)

(文章:瀬角龍平)